

事

例

上坂元絵里

●N子が持ってきた種を蒔く

年長組に進級した四月下旬、登園したN子が小さなビニール袋を教師に差し出しました。

「これは何かしら？」と尋ねると、N子は、「たね」とだけ答えました。ビニール袋を開けてみると、中には小さなチャック袋が幾つもあり、チャック袋の中には種類別に分けられた種が入っていました。マリーゴールド、ヒマワリ、アサガオ、他に教師の知らない種もありました。

「ママが幼稚園に持っていったらって言ったの……」とN子は小さな声で付け加えました。一月

の保護者会で、N子の母親が年中の園生活を振り返って「通園の道すがら見つけた種がビンいっぱい集まりました」と話していたことが頭をよぎりました。この種にはN子が生活してきた年中組の一年間が詰まっているように感じ、年長組になったN子たちと一緒に蒔いて育てたいと考えました。

ちやうど隣の組にもマリーゴールドが育ち始めていたので、まずマリーゴールドの種を蒔くことにしました。他の種も蒔きたいと思いつつ半月が過ぎ、せっかく持ってきてくれた種の蒔き時を逸してしまつてはと思い、五月半ばのある日、昼食後にプランターを用意し始めました。

「何しているの？」と尋ねる子どもたちに、「ヒマワリの種を蒔こうと思うの。やりたい人いませんか？」と声をかけると数人が集まりました。種を蒔きながら、「これ、食べられるんだよね」「モルモットが好きなんだよ」と話していて、ヒマワリの種にはなじみがあることが伝わってきました。

●苗の引っ越しをする (二回)

一週間ほどで芽が出てきました。子どもたちは、「先生、ヒマワリ出たよ!」とすぐに気付いて伝えにきました。芽生えた双葉は小さいけれど何だか頼もしく見えました。さらに数週間後、茎が伸びてくると、蒔いた種の数が多過ぎてプランターでは狭過ぎるという状態になってきました。

その様子に気付いた副園長が、「少し狭くなっちゃったからお引っ越ししましょうか」とN子たちに呼びかけると、Y子たちも張り切って手伝い始めました。ヒマワリの苗を副園長が掘り上げてN子たちの手にのせると、子どもたちは優しく手で包むように持ち、大きなプランターにそつと移植していきました。

移植したヒマワリはぐんぐん大きくなり、再び植え替えが必要と思われるようになりました。ちようと花が終わり更地になっていた年少児の砂

場脇の花壇がびったりではと考え、年少児担任とも相談して移植場所に決めました。大きくなったヒマワリの苗をグイッとシャベルで掘り上げ、花壇に一株ずつ運んでいく姿はまるで大切な赤ちゃんを抱いているようでした。一回目の時より根が張っていることを体感し、ヒマワリへの思いが強くなっていったように感じました。

植え替えたお陰でしょうか。その後もヒマワリはすくすくと伸びました。年少児が小さなじょうろで水をやっている姿もよく見かけました。年長児は園庭へ出る時、ヒマワリの成長を遠目に見守っている様子があり、「ヒマワリを見てようー!」「ヒマワリ伸びたねえ!」等のつぶやきも聞かれました。

N子が持ってきたヒマワリの種は小粒でしたので、教師の背丈を越えるほど高く成長したことには内心驚きました。そして六月も中旬を過ぎると、今度は花がちゃんと咲くかが気になってきま

した。

●「花は咲くかな?」

時折、N子やA子と、「お花咲くかな?」と、近くまで見に出掛け、「あれはつぼみかな」「きつとつぼみじゃない?」など、期待に胸をふくらませて見上げていました。

七月に入り、「終業式までに開花してくれればいいけれど……」と願いつつ、「でも自然の時期を人間が選ぶことはできない」と気をもむ日が続きました。

そして夏休みまでわずか数日となったある日、三輪が同時に開花したのです。A子が一番に気づき、「ヒマワリが咲いた!」と知らせにきてくれました。子どもたちと花を見上げ、口々に「きれいだね」「どんなヒマワリよりかわいい」と喜び合いました。花は少し小ぶりでしたが、とても立派に感じました。



夏休みには、台風の強風で倒れかけた茎に竹竿を添えて補強したり、小鳥が種をついばんでいることに気づき、慌てて防鳥網を張ったりというハプニングにも次々見舞われました。

ヒマワリの写真を添えた暑中見舞いを受け取ったN子は「ヒマワリを見に行ってもいいですか」と、夏休み中に園を訪れました。花が枯れて下を

向き、種が出来始めていること、網が掛けられている様子など、ヒマワリの変化をしつかり見てきました。

●ヒマワリの種を取る

二学期始業式の翌日、N子が、「ヒマワリの種、取ろう」と教師に声をかけてきました。一緒にヒマワリを見上げながら、「種、出来てるみたい？」と尋ねると、N子は、「うん、出来てる」とうれしそうに答えました。「まず網を外さなくっちゃね。でも二人では無理ねー」ということで、仲間を探しました。

四、五人が集まりましたが、防鳥網はヒマワリと絡んで簡単には取れません。力を合わせ、やっとの思いで網を取り、茎の支柱を外しました。

子どもたちと一緒に、茎は根に近いところを切りました。そのヒマワリを抱きかかえると、その重さや茎の太さを実感できたようで、子どもたち

はうれしそうに歩き回っていました。

そしていよいよ種取りです。

最初はなかなか種が外れませんでした。コツがわかるとポロポロと種が外れるのが面白くなり、子どもたちは話もせず、

黙々と手を動かしていました。みんなで取った種をベットポトルに集める作業をしながら、R夫が、「種はどうするの?」と言いました。

「小さい組に見せてあげる?」「たねのはくぶつかんするのはどう?」などアイデアが出ていました。



● 「たねのはくぶつかん」を開く

たくさん集めたヒマワリの種は、保育室の机に置いておきました。ヒマワリの種の存在感からか、その机には、子どもたちが通園途中で見つけた実や種、弁当で食べた果物の種等が集まり、次第に数や種類が増えていきました。集めた種を飾れるようなコーナーを設けると、子どもたちは、集めた種に「ヒマワリ」「ビワ」等、名札を付け始めました。

「『たねのはくぶつかん』をやりたい」という声が大きくなり、アトリエという多目的室に次々に種を運び込み、陳列する場所を作りました。園庭の地図を大きく拡大印刷し、種を見つけた場所を書き込めるボードも設けました。

H子たちは、見に来た年少児に、「これはヒマワリのたねです」「こっちにもありますよ」と張り切って説明します。「年少児にとってどれくらい興味

をひくものだろうか」という教師の懸念をよそに、年少児は神妙な面持ちでじっくり見てくれていました。

しばらくするとM子がヒマワリの種を見ながら、「これをお土産にあげたらどう？」と提案しました。周りに居た子どもたちも、「いいね」とすぐ



に賛成し、小さな袋に種を詰める作業を手際よく分担して始めました。年少児は種をもらって大喜び。この中の数人はすぐに種を蒔き、季節外れにもかかわらず芽

が出て、三月には花が咲いたという驚きの報告も届きました。

●種を蒔くことの意味

子どもたちはヒマワリの種を蒔き、変化を見守り、新たな種を集めるまでを四か月余りかけて体験しました。

小さな種から芽が出て、見上げる高さに育ち、大輪の花が咲いたことは、子どもたちにとって印象的だったことでしょう。一輪の花からたくさん種が取れた感動から、育てる喜びと楽しさを体で感じていたと思います。

一連の取り組みの中で、N子は以前よりも積極的な顔を見せるようになりました。母親が持たせてくれたとはいえ、自らの手で集めた種を友達と一緒に園で蒔き、育てることに率先して取り組む過程で、気付いたことや自分が知っていることを得意げに話すようになりました。

卒園間近のある日、再び自宅から種を持参し「小学生になっても見に来るから」と言いながら、友達数人とプランターに種を蒔いていったN子。その後ろ姿は以前より自信にあふれていて、「ヒマワリみたいに伸びやかに育つてね」と教師は心の中でつぶやいていました。

子どもたちが何かを手に、園に持ち込む時、そこにはいろいろな思いが込められています。ここではそれが種でした。N子を持ってきた種を蒔き、植え替え、大切に育てる過程を子どもと共に味わう中で、種のもつ不思議な魅力に触れられた気がします。種は、育てるものの思いを受けて育つのだと……。そして、大きく育つたヒマワリは、「時間・空間の変化」を子どもたちにしつかりと感じさせてくれたように思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)